心が動き、言葉を獲得する

樋口ミユ

日々は言葉に溢れている。そして人々が溢れた言葉に慣れてから、ずいぶんと時が過ぎたように思う。これからもっと社会と世界と日々は大きく変化していく。演劇はいつだって世界と合わせ鏡だから、どんな変化があらわれていくのだろう。

文字を書くすべての人へ。どうか、あなたが傷つくこと、恐れること、喜ぶことをつぶさに見てください。心が動いたその瞬間に、人間は本当に言葉を獲得すると思うから。

『光と虫』、伊地知克介さんの作品は、毎回とっても好感が持てる。ラストの「頑張れ」という台詞に、そうだなぁ、あの頃、先が見えない暗闇の中、みんなとても頑張っていたなぁと思い返す。上演もきっと素敵だったのだろうと想像ができる。だけどしかし、と言葉を続ける。この好感度は、登場人物たちは確かに会話をしているが、それは情報の交換であって、人と人が関わっているわけではないところからやってくるように感じた。コロナ禍、バルコニーでの会話という状況設定。状況とは場所や時のみを指すのではなく、作者がこの世界をどう捉えているかという視点も含まれる。だからこそ作家の表現というものは、ある意味他者には異物であると思う。作家の意思や哲学や美学が表れているからだ。露悪的なものがイイと言っているのでは決してナイ。人と人が関係する時、どんなふうに心が動き、どんなふうに乱れていくのか。情報のやり取りを超えていくために、きっともう一歩、踏み込んでいける。

私道かぴさんの『てばなれ』は、前々回の佳作作品から、なにか、大きな試みをしているのではないかと感じられた。身体を見つめるマッサージテキストの作者の眼差しの解像度はとても高い。自分の体を、日々細かく見ている人間は実はそんなに多くはないから、このマッサージテキストは読み手の身体への意識を促すものである。ただ、このマッサージテキストと、ドラマテキストがうまく噛み合っていかない違和感を感じた。ドラマテキストは確かに構造とポイントは押さえている。では何が？ やはり解像度なのだと感じる。身体の内側、柔らかい心の痛みや傷を見つめる解像度が、荒いように感じられた。心を見ることは体に通じ、体を見ることは心に通じる。その二つをつなぐ道、神経回路が生み出されていくといいなと思う。

『かぜのたより』の山村菜月さんの台詞は、リズムよく小気味よい令和の言葉。なるほど、現代は炎上しないために断言をしないことが生き延びるコツなのだな、と納得する。核心にたどりつかないためにたくさんの無駄な会話をする。これは新たな繋がり方なのだとハッとする。相手を理解するために言葉を尽くす、というよりも、ここで交わされる会話は相手をダウンロードするためのものなのだろう。自分一人になった時に再生できるように、情報をたくさん取り入れている。では、この繋がり方をした彼、彼女たちはどんな未来を生きるのだろうか。それを見たいと思う。どんな時代も本質は変わらないが表現する言葉は変わる。言葉が変わるときっと世界は変わる。その変化していく世界を描くことを大いに期待したい。感じる世界を小さくしないで、無意識に自分を縮こまらせないで、書きたいことを書いて欲しいと願う。

読み始めのドキドキ感は、ナンバー・ワン。橋本匡市さんの『躾けられない獣の群れ』。読んでいくと脳内と心と体にたくさんの刺激をくれる。それぞれのシーンの絵はとても劇的。イイぞ！と、読み進め最後のページにたどり着いた時、あれ？ と、声が漏れた。作者は、本当は一体何にフォーカスをかけたかったのだろうかという疑問がむくりと生まれる。視点がたくさんあるように感じた。登場人物それぞれ全員に均等に、時間や言葉や思いを配分されたような印象。何にフォーカスを当てるのか。ピントがしっかりと合えば、心許しているのではなく、生き延びるために群れる獣たちが、読み終わった後にもっと鮮やかに浮かび上がったのかもしれない。

作者が世界に変化を起こそうとしているのではないかと感じられた植松篤さんの『トレマ』は、難点があることを承知の上で佳作に推したいと思った。過去をなかったことにしないことが、未来を作っていくことになると信じられる作品だと思う。そして可能性があると感じるのは、台詞の面白さ。誰が何を選択するかで、世界は毎秒ごとに変化し、選択されなかった空間は消滅することなく膨張を続ける。この世界のシステムをどう表現するか。この「少し不思議」の難しさを乗り越えるには、言葉と熱のダイナミズムが必須なのだけど、もし植松さん特有の現代的な台詞でそのダイナミズムを作れるのであれば、 今までにない新しい「少し不思議」が描けるのではないかと希望が大きく膨らむ。

山岡徳貴子さんの圧倒的クオリティの『そして羽音、ひとつ』。作家はどうして作家なのか。作家は、社会や人間や、あらゆるすべてのことを「私」という身体を通して言葉を紡ぐ。登場人物たちの会話で、その人がどんな声でどんな姿なのかまでも想像できてしまえる肉体性を持った台詞。だからこそ悍（おぞ）ましく美しいと感じられる。楽園の地獄と名づけたい。男が憎いのに、男を好きにならざるを得ない多くの女たちの苦しみは深くて痛い。社会や本能や遺伝子、心や欲や身体、好きなのか依存なのか、もう説明なんてできないくらいに人間はこんがらがっていることをこれでもかと描き出す。かと言って、これは虐げられている女性のことだけに限った物語として描いているわけではない。誰にも当てはまるのだ。誰も彼も、実は相手のことなどちゃんと見ていない。自分の見たいものを、相手の、人間という器に注ぎ込み、自分用にカスタマイズして現実を作り出して生き延びている。あなたも私もみんな貪欲に自分のために生きている。他人を気遣うフリして自分の主張を押し出す。老女もまた、他に選択肢などなかったとも言えるし、別の角度から見れば、生きていくためにそこに居続けるメリットを選択していた、とも言えるだろう。それでも、と私は思う。老女の、とっさの行動か、あるいは長年溜めてきた思いからか、老女が自分のパワーを動かした瞬間を見たいと思った。あるいは老女のパワーを見た瞬間に、老女のように生きている人々がパワーを感じて欲しいと思った。その私の思いさえも、この作品の器に自分の願望を注ぎ込んでいるのかもしれない。

楽園の地獄に生き続ける人々は、現実にたくさん存在する。それは老若男女、無数に、驚くほどたくさん。笑いたくもないのに笑っている人ばかりのこの世界だもの。このような事実がある、と舞台に上げ共有することは、まず演劇ができる重要なことであるのと同時に、舞台上で聞こえるその羽音ひとつが、次の羽音ひとつに繋げられるかもしれない。という、私の欲を言葉にして、31 回目の選評を終わりにしようと思う。